
第4章 三苦村の歴史

三苦村字図



．三苦の概要

私たちのふる里三苦は、その地名の由来のとおり、古代に源を發し、玄界灘の荒波・寒風の厳しい自然にさらされながら、先人たちの嘗々とした努力によって築かれてきた集落である。

古代から中世、近世のころは、文献によってもよく分からないが、近世も後期（江戸時代）になると、農をもって生活の糧とし、神社の祭や営農のための沼・溜池などの構築がなされ、はっきりとした村の形態ができていたようだ。

古書には裏糟屋郡かすやごうり三苦村と記されているが、その範囲は広く、現在の美和台三・四・五丁目や美和台新町はもちろん、西は遠く志賀島村と境していた時期もある。

明治維新から昭和20年（1945年）の終戦までを区切りとすれば、明治22年（1889年）に上和白村、下和白村、三苦村、塩浜村および奈多村の5ヵ村が合併して糟屋郡和白村が發足し、それまでの三苦村は和白村大字三苦となった。この時期は農地の耕地整理や耕作の技術改良などがなされ、大いに農業振興がなされた時期であったが、大戦中は労働力の不足を家庭の主婦や老人・子どもで補って、食糧増産に邁進した時代でもある。

昭和20年以降を現代とすれば、昭和29年（1954年）に町政が布かれて和白町となり、昭和35年（1966年）8月に福岡市と合併し、和白地区に近代的な発展の兆候がみえてきた。美和台（三・四・五丁目）の開発にあわせ昭和44年（1969年）に農地の用途指定がなされ、三苦地区の農地は、そのほとんどが市街化区域に指定された。以後、三苦の様相は変貌し、平成8年（1996年）4月には三苦小学校の開校とともに三苦校区が誕生した。

1．三苦の由来

三苦の地名の起源は4世紀の神功皇后の物語に始まる。

神功皇后が御西征のとき、対馬の沖で暴風雨に遭い、それが鎮まるようにと海神である志賀三神を祭って祈りを捧げ、その供物と苦を一緒に海に投じて苦の漂着した所に社を建てて祀ることを誓ったといわれる。そのときの苦が三枚、今の三苦の海岸に流れついたことから、その地を三苦と名付けられた。

また、古書に『往古香椎宮神幸の所なり 神功皇后御西征の神助報贄の遺風なりと言う
また中臣鳥賊津臣命西征に供奉して龍船対島府中を離れ 雷雨甚だしく風濤強かりしに
命は海神に誓い 苦を三枚とりて海底に沈めしに 其の駿にや風濤は穏やかになりぬ の

ちにその苦流れ寄る処に社を建つ 是三苦綿津見神社なり』と記されている。

ある古老の話では「神功皇后の西征軍は姪浜の膳立の付近から船出した模様ですが、玄界灘に出ると大波に遭ったため、龍神を祭り平穩を祈りました。この祭壇に使った苦に供物を包んで海に投げ入れたところ、4枚は長州（山口県）萩の近くに流れつき、ここを四苦村と言い。他の3枚は三苦に流れ着いたので、ここを三苦と言うようになった」とも語り継がれている。

これら大同小異の伝説を要約すると、三苦付近一帯は4世紀当初の頃は、灘あるいは灘の津と呼ばれていたが、神功皇后の西征によって一躍時代の脚光を浴び、人口も増し発展し始めた。そのころから、いつとはなしに三苦と呼びならわすことになったものらしい。西暦700年を過ぎるころには三苦郷として和白郷と共に香椎宮旧記にハッキリと記載されるに至っている。

また、『香椎宮の神領としては 和白郷（70町）三苦郷（70町）』とあり、その後『龜山天皇文永五年（1268年）四月四日詔ありて云々……』と、三苦郷の名称が記録されていて、天正年間（1573～1591）の『^{てんしょう}指出前帳』には三苦村と記帳されているともいわれている。

元禄16年（1703年）福岡藩士 大野忠右衛門貞勝によって三苦村と下和白村の海浜が埋め立てられて新田開発が行われ、塩浜村が誕生した。また、三苦村のうちであった奈多は、幕末のころ分村して奈多村となったようだ。

明治初期は戸数82戸・人口385人で、主な職業は農業であり、人家は本村（三苦六丁目一帯）64戸・山ノ内（三苦二丁目北側）5戸・北原（塩浜一丁目小学校付近）3戸・西（塩浜一丁目四社神社付近）6戸に分れていた。

2 . 三苦和泉守基宣と森の屋敷（綿津見神社の飛び地境内）

永禄7年（1564年）一夜の火事で丸焼にされた宗像神社宮司の氏貞は、火事から7年を経過しても宮再興の財源が集まらず、日夜思案に暮れていた。ところがある日、山の様な大船が一隻難破して津屋崎浜に漂着した。検使に調べてもらおうと、この船は唐へ行った貿易船で、木綿を始め種々の宝物を積んでの帰途、難破したものと分かった。

古来、難破船は芦屋津から新宮湊までの海岸に打ちあげられたものは、積荷ごと宗像神社の所有になるとの慣習法が存在していた。従ってこの難破船の積荷もごっそり宗像神社のものとなりそうだった。ところがこの難破船は京都の聖護院門跡の貿易船であったため、門跡から異議が出され、しばらく紛争が続いたが、結局は古来からの慣習法が勝ち、すべて宗像神社の所有となった。この財をもとにして氏貞はこの年の10月に仮殿を作り、よ

うやく宗像神社の再建に着手することができたと伝えられている。

この年（1564年）の正月、三苦郷を領有していた香椎宮四党の一つ、三苦家33代基宣が香椎大宮司に就任している。現在「森の屋敷」と呼ばれているところ（三苦小学校西側丘陵地）は、この基宣のころの屋敷跡であろうと想像される。

昭和20年代、この地に地元の人々によって建立されたコンクリートの祠と鳥居があり、お稲荷様が祀られている。この稲荷様は一時「綿津見神社」の境内に祀ってあったのだが「わしはお宮には住まん。もとの森の屋敷に帰えしてくれ」とのお告げが村人であって、再び現在地へ移したと伝えられている。

大正のころまでは、近郷の漁師たちが自分でとった新鮮な魚を持って、豊漁を祈りにお詣りしていたという。また、ものを無くしたときに、ここのお稲荷様に祈願をすると、無くしたものが出てくるというので、参拝する人も多かったといわれている。

別の伝えによると、西暦800年ごろ、香椎宮の神官として和氣重春という方が京都から下って来て、三苦重春と姓を変え、以後31代、代々三苦に居を構えていたので、その屋敷跡を「森の屋敷」と呼ぶようになったという。



森の屋敷の稲荷神社

3 . 権宮司三苦氏と三苦郷

天分6年（1537）大内義隆は少式を征伐して筑前に一応の平和を確保していた。この頃、三苦郷を領有していた香椎宮の大宮司三苦家では内紛が起こっていた。旧香椎町史によると三苦家を次のように紹介している。「権宮司三苦家の家系によると、三苦氏は天兒屋根命あまこやねのみことの後裔、中臣鳥賊津臣命なかとみいかつおみのみことから出たといわれている。鳥賊津大連は神功皇后に従って西征の折、対馬付近で大暴風雨が起り御船も危くなったとき、三枚の苦をとって船舳に立ち出で、海神に祈り、苦を海中に投入したところ、風雨直ちに止み治まり、苦は東方に流れて行った。凱旋後その苦は灘に流れついていたので、その地に社を建て苦を神体として奉祀した。故にその地を三苦といい、社は志賀三神を祭っている八大竜王社（綿津見神社）である。

さて、香椎廟がなると天兒屋根命あまこやねのみことから24世審樂朝の右大臣大中臣清磨公の孫、今磨の子重春を大膳紀氏連宿弥と共に廟司とすることとして三苦郷を与え（神官は同時に領主）かつ三苦の姓を賜り香椎に下向した。それで重春が神職として三苦家の祖であり、往古は香椎四党の一として大宮司家であった。

重春から31代目の親宣に二男があって長男を八郎匡基、弟を六郎清宣といったが、兄は家を継ぐことができずに弟清宣が襲ぎ、正嫡として大宮司となり別所に住んでいた。兄匡基は悶々とした日々を送り、父の死後弟を退けて所領を横領しようとしたが、一社中許さず、天分6年てんぶん（1537年）9月には大内氏に通じて所領を分領し自ら権宮司となった……」

これによって当時の三苦は、領主として兄匡基が居を構え、立花城主（三代目）立花親貞の庇護下にあった香椎宮一門を離れ、大内の庇護の下にあったことがうかがわれる。

4 . 三苦の現代

集落と海岸との間の松林に広がっていた墓地は、玄界灘の荒風と松喰虫の被害にあって荒廃した。集落の近代化、生活環境の改善を図る必要性から共同墓地化を図るため、昭和31年（1956年）共同納骨塔建設委員会 委員長 堺藤三郎氏（故人）を設置して建設に着手、昭和33年（1958年）11月に落成した。昭和41年（1966年）以来、三苦駅東側の丘陵地の開発、また、三苦駅西側の田園地帯や奈多に続く松林なども宅地化が進み、昔日の面影は一変した。



三苦共同納骨塔

美和台団地

1965年（昭和40年）、三苦駅東側の丘陵地帯（山林、畑、水田）を西日本鉄道（株）が買収し、宅地開発計画が地元にて提案された。三苦町内会は委員会（委員長 堺 徳氏）を結成して対応にあたり、翌昭和41年に売買契約を締結した。

昭和44年～45年、西鉄本社の直営事業で造成工事がなされ、昭和47年3月より建売住宅及び住宅地が発売された。工事は（株）松本組、（株）鹿島建設によってなされ、高級住宅地が出現した。また一方、大字下和白の山林・水田は福岡市住宅供給公社の開発によ

って、一大住宅地が形成され、美和台団地と名付けられた。西鉄造成地区は美和台三丁目、四丁目、五丁目である。昭和49年、美和台小学校の設立に伴い、美和台校区として分離独立することになった。



美和台開発前の三苫駅周辺（右側が美和台）

平成7年（1995年）8月6日には三苫浜地区の土地区画整理準備組合が結成され、この工事が完了すると、この地区一帯の様子は一変することであろう。

平成8年（1996年）4月、和白小学校が児童数増加でマンモス校となったため、三苫地区全域を校区とする三苫小学校が開校された。

三苫集落の住環境や農作物を海の強風から守り続けていた玄界灘防風林の中で、唯一300年を超える黒松の林があり、その貴重な緑地が自然資源となっていたが、第2次世界大戦終結後から蔓延した松食い虫によって全滅した。この黒松の防風林を再生させ、次世代に残すために松林再生会が結成され、平成9年（1997年）3月、三苫小学校開校記念植樹とあわせて、行政の支援のもと、三苫校区一丸となって黒松の苗を植え付した。

三苫小学校が開校されて以来、公民館は福岡市の一小学校区一公民館設置の方針に従い、平成11年（1999年）4月に設立開館（東区三苫三丁目3-31）された。これと同時に三苫老人いこいの家も隣接して新築設立された。

三苫校区誕生時の世帯数及び人口

世帯数	人口		
	男	女	合計
4,096	5,266人	5,220人	10,486人

三苦小学校設立時の児童数

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	計
クラス数	3	3	3	3	3	3	18
児童数	115	107	91	117	82	108	620



三苦小学校



三苦公民館



三苦老人いこいの家

遺跡と古墳

1. 三苦永浦遺跡

永浦遺跡群は福岡市東区と糟屋郡新宮町との境界に接する丘陵地帯に広がり、博多湾と新宮浜の分水嶺となっている。丘陵の標高は10～40mで、同じ丘陵の西側には三苦京塚古墳、東側には新宮町人丸古墳などの大型古墳がある。この丘陵一帯に区画整理の計画が出たため、福岡市教育委員会が造成工事の前に埋蔵文化財の調査を行った。

この地内には11カ所（A～K）の遺跡があり、弥生時代の溜井（古代ダム）や弥生から古墳時代の集落や墓地などが多数発見された。

弥生時代のものとしては、弥生時代中期後半（紀元前1世紀～紀元初頭）から後期初頭とみられる溜井9基、溝3条などや竪穴式住居が発掘された。

溜井は谷頭付近に集中して作られ、規模は大小あって、最も西側の溜井は長さ53m、幅13m、深さ約6m。溜井のうち、西側の2基に暗渠が確認されている。北側の暗渠は幅0.3～0.8m、深さ0.5m、長さ10mあって溝底に拳大円礫（こぶし大の玉石）を多く詰め、埋土で覆ってあった。

石組のすき間に水を通すことで溜井にたまった大量の水を少しづつ水田に流す仕組みで、水の大量流失を防ぐため溜井と溜井をつなぐ水路も作られていた。溜井群全体で水量調節ができていたのではないかと見られている。「出土した暗渠は、これまでの例よりも約3百年さかのぼる国内最古のもので、溜井から水を水田に送るかんがい用とみられます。かんがい用暗渠は弥生時代のものとしては初めての出土です。考古学関係者は、弥生時代に想像以上に高度な農耕土木技術があったことを示す貴重な発見」と注目されている。「溜井はわき水や雨水をためて農業や飲料水用に使った施設であり、溜井の周囲に大規模な集落があったことは確かで、弥生時代は稲作が本格化し大量の水が必要になったため、今日と同じように水源確保に苦労していたのかもしれない」と説明してある。

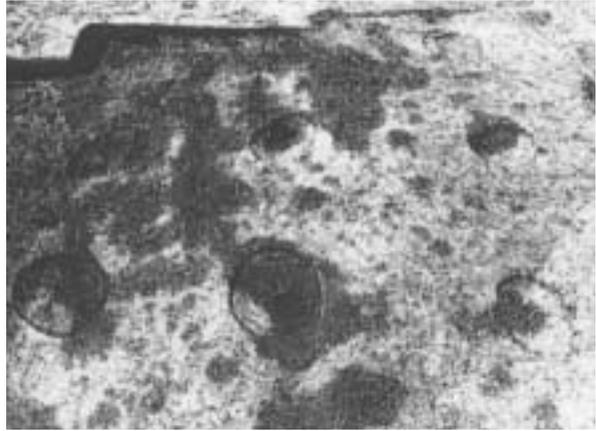
溜井の内部からは多数の遺物が出土し、土器類には甕^{かめ}、壺、高杯、鉢、器台、支脚や石斧、砥石、石包丁などの石器。また、鉄斧、鉄鍬^{ぞく}



弥生時代の溜井（古代ダム）

(鉄製の矢じり)などがあった。竪穴式住居は谷頭を囲むように分布し、径3～4mの不整形円形であった。

また、弥生時代中期前葉の竪穴式住居2棟、土壙(洞穴)4基、柱穴多数、中世から近世の埋め糞、土壙、柱穴、溝なども発掘されている。竪穴式住居は直径7.5mの円形で、住居内から土器類やナイフ型石器などが多く出土し、この他に縄文時代の遺物も出土している。調査地内11カ所(A～K)の各遺跡にわたって40棟近くの竪穴式住居跡、掘立て柱建物跡、柱穴、土壙などが多数発掘されている。この竪穴式住居は弥生時代中期後半から古墳時代初頭までと古墳時代後期に二分されるが、前者では円形住居から次第に方形住居へ変化しているとのこと。その住居などからは多くの土器類、石器類、鉄器類などが出土している。鉄器には釣針、ヤリガンナ、鉄斧などが、また、石器には魚網錘、釣り用錘などがあって、他に碧石、水晶、ガラス玉、滑石製品などがある。



掘立柱建物跡

この遺跡群の中には、いくつかの古墳があり、「永浦1号墳」とされた古墳は前方後円墳で、規模は後円部径約20m、全長約30m、主体部は後

円中央部にある単室両袖の横穴式石室で、南西に開口している。内法は長さ2.9m、幅1.9mである。石室内の敷石上から武器類(鉄鏃、弓金具)や工具(鉄刀子)装身具(管玉、ガラス小玉)などが出土している。また、周構内から須恵器・土師器が出土していて、築造時期は6世紀中頃と見られる。古墳の周辺からは前後する時期の建物跡や、土器、石器類が出土して、その中には縄文時代晩期の石器や勾玉もある。

「永浦2号墳」とされた古墳のまわりからは井戸1基、溝などが発掘された。この古墳は破壊が著しく墳丘は全く残っていないが、北側の周溝痕跡などから前方後円墳と判断された。大きさは、後円部が径約19m、全長約27mと推定されている。石室は後円部中央にあり、南西に開口する単室両袖の横穴式石室である。内法は長さ2.7m、幅約1.5m。敷石上から武器(鉄鏃)や装身具(管玉、ガラス小玉)などが出土した。他に石室の周辺から須恵器などが出土し、築造時期は6世紀初頭から前葉頃と見られている。他に小型古墳1基、焼土壙1基、柱穴多数があり、直径約10mの円墳で、単室両袖の横穴式石室、石室全長5m、須恵器類、鉄器などが出土し、築造時期は7世紀中葉と見られている。

また、本調査区の丘陵最高所に立地する竪穴式住居は、円形で直径6～7mもあって、

弥生時代中期後葉（紀元前1世紀～紀元初頭）頃のものともみられ、立地条件などから「高地性集落」と考えられている。この「高地性集落」は、弥生のクニ、奴の国成立に伴う争乱で造られた砦ではないかとみられ、玄界灘糸島半島をはじめ博多湾を含めて周囲約30km圏内が一望に見渡せる高台にある。中国後漢から金印を授かり、強大な権力を誇った奴の国の誕生のなぞを解くカギになると期待されている。一辺が70cm程度で深さ約15cmの四角い穴も2カ所確認され、用途ははっきりしないが、炭のかけらが出ていることからオオカミのフンを燃やして「のろし」を上げたあとではないかとの見方もある。最も注目しているのはその立地の良さで、集落跡地からは金印の出た志賀島や奴国の本拠地とされる須玖岡本遺跡（春日市）、伊都の国の拠点とされる前原市周辺などが見渡せる。このため外敵の侵入を監視したり他のクニと通信する役割を持った集落と判断され、出土した土器には奴国系統以外のものもあるため「小さな国が争乱を繰り返しながら奴国にまとまっていったのだろう」とみられている。

福岡市教育委員会は、本遺跡調査報告書を次のようにまとめている。

「永浦遺跡群では、旧石器、縄文、弥生、古墳時代において重要な成果があった。

旧石器、縄文では当該資料の少ない市内東部地域を補填するものである。弥生時代は5地区に住居群を検出した。中心集落はA地区 I地区と移動し、他は中期後葉に一時的に分村したものとみられる。このうちJ地区は高地性集落である。

古墳時代はD、I地区に集落があり、丘陵上に3基の古墳が造られている。永浦1・2号



永浦遺跡群分布図（黒印は古墳）

古墳は小型の前方後円墳であり、隣接し、規模、主軸方向、石室の開口方向がほぼ一致する。6世紀前葉～6世紀中葉頃に造られた2代の累代墓とみられる。本地域の首長墓であり、同じ丘陵上の他の大型古墳と系列が推定される。

また、L地区の古墳は小規模であり、古墳終末期の様相をもつ。弥生～古墳時代の集落からは農耕具以外に漁業、交易関連遺物も多く含まれ、集落立地と共にこの集落の経営基盤の様相を示唆している」

2 . 三苫京塚古墳

三苫遺跡群は東区三苫の玄界灘に沿って連なる南斜面に展開し、その範囲は東西450m、南北950mにもおよぶ。三苫京塚古墳はこの遺跡群の北端部に位置し、標高20m位のところにあった。

福岡市の人口の増加に伴って最近では近郊の丘陵部の開発が中心となっていて、大字三苫字京塚（三苫七丁目）157の宅地造成に伴い埋蔵文化財の事前調査が行われた結果、予定地は過去に大規模な削平を受けており、古墳の他に遺溝は認められない。古墳の現地保存

は計画上困難であることから発掘調査を行い記録保存をはかることに決定された。

発掘調査は平成元年（1989年）2月18日に着手し約1ヵ月半を経て平成元年3月31日に終了した。

この調査には三苫や奈多から十数名の人が発掘に協力された。調査では弥生時代中期後半より後期初頭の竪穴住居址1棟、古墳時代後期に築造された古墳1基を発見したが、どちらも大規模な攪乱や削平を受けており良好な状態で遺存していたとはいえない。発掘品としては、住居址から石器（石包丁、石斧）などと土器（高杯、甑）などが出土した。一部は古墳墓道からも出土している。その他鉄製



京塚古墳の発掘品

品（太刀、柄頭飾弓、馬具）や装身具（ガラス玉、琥珀耳飾）等が出土している。なお、この発掘調査に係わる遺物記録類の全ては福岡市立埋蔵文化財センター（博多区井相田二丁目）に収蔵されている。

今後の問題点として、今回の調査では三苦遺跡群の一端を知り得たにすぎず、三苦丘陵地における弥生時代集落の規模やその生活基盤等是不明のままである。6世紀を中心とした集落が調査地の近辺に存在していたことは明らかであることから、生活の場、葬送の場の両面から解明する必要があるだろうと思われる。なお、近く施工予定の三苦浜地区区画整理に伴う遺跡調査によって前記の解明の足掛かりが得られるものと期待される。

3. ^{くつわみず}轡水の由来

伝説によると、神功皇后の西征軍は帰途清水（飲料水）の欠乏に悩まされながら、ようやく粕屋郡古賀の花鶴浜にたどり着いたが、ここにも飲み水が無かった。その時、皇后の乗馬が轡を噛み切って走り出し、後を追ってついて行くと、三苦の轡崎「鏡ヶ井戸」と呼んでいる所まで馳せて来て、前脚で盛んに大地をけた。昔から馬が前脚でける場所には水が湧くと言われていたのでそこを掘ると、果たして珍しい清水が湧き出てきた。そこでこの付近の出崎一帯を轡崎と呼び、その井戸を^{くつわみず}轡水、また、その馬の轡を埋めたのでその裏山を轡納山と呼ぶようになったという。

今この「鏡ヶ井戸」は轡納山託乗寺の中庭に在り、深さ9尺（約 2.7m）位の井戸が一日中汲んでも水が渴れることはなかったそうだが、大正12年（1923年）6月に起工された和白～宮地嶽間の電車線路が轡納山を掘り割ったのちは、渴れることはないが湧水量は少なくなっている。



鐘ヶ井戸

神社・寺院・史跡石造物

1. 三苫綿津見神社

所在地は福岡市東区三苫六丁目21番の海岸近くにあつて、神社境内の由緒石碑にはつぎのように記されている。

綿津見神社由緒

祭神 ^{しが}志賀三神（現在は綿津見三神） ^{とよたま}豊玉姫命

境内社 ^{かまど}竈戸神社 ^{すが}須賀神社（舞神社） ^{くろつ}黒津神社 ^{いなり}稲荷神社

^{さんぼうだいこうじん}三寶大荒神社 ^{わかみや}若宮社 ^{こくうぞうぼさつ}虚空蔵菩薩 ^{だいにちによらい}大日如来

鎮座由来

香椎宮旧記に 神功皇后征韓御渡航の際 对馬を発船された時 ^{にわか}俄に大雷雨大風濤
起こり 御船危殆（あぶない）に瀕す

此の時 御船の^{とま}筈三枚を海中に投入し 何れの時何れの処にあれ此筈の流れ寄らん
地に社を建て拜祭せんと海神に祈られし処 ^{たいどころ}立処に風濤治り 征韓の大業を易く終え
給い 凱旋後筈の漂着せし地に三枚の筈を神体とし社を建て 海神を拜祭された 此
の神社なり 又此の所縁により地名を三筈と言う

古来香椎宮神輿渡御報の儀あり 中古より神使の神祭となり現在に至る

香椎宮宮司 木下祝夫 識

筑前の国風土記によると『中にも九月九日 ^{しんよ}神輿（みこし）を浜男の頓宮に御幸なし奉
り（中略）十日には大宮司職の人 明神の御使いとして 原上村におわします川上大明神
に詣で（中略）十一日には三苫の竜王社（綿津見神社）に参りて拝す これ皆 海神なれ
ば西征の時保護の御徳をむくわせ給う儀式なり云々 この祭りには 太宰の帥 大伴旅人
部下と共に参拝す（728）』と記録されていて、以来、定期的に香椎宮から神官の参拝が
行われている。

当初は、八大竜王社と呼ばれていた。当時の面影を示すものとして「八大竜王社」と彫
られた石の額がある。また、参道には一對の「八大竜王社」と彫られた石灯籠がある。

この神社には、鎌倉末と室町時代（1392～1573）の作といわれる二対の木造^{こまいぬ}狛犬が保
存されている。



三苦綿津見神社

平成8年3月から半年間、福岡市博物館で開催された「ふくおかの文化財展」では、綿津見神社の木造狛犬が展示された。

その「ふくおかの文化財展」で...獅子・狛犬...について次のように解説がなされている。

「今まで神社に安置され一般に狛犬と呼び慣らされている一対の獅子・狛犬は、もともとはインドで佛の^{しんい}神威を象徴的に

示すために一対の獅子（ライオン）形を仏像の台座に刻んだのが起源とされています。

それが仏教とともに中国・朝鮮半島そして日本に伝わっていくうちに、しだいに墓域などを護る想像上の守護獣としての性格が加わり、角のある狛犬、角のない獅子の組み合わせになったといわれています。日本でも飛鳥・奈良時代など初期には獅子と狛犬の違いは必ずしも明確ではありませんが、しだいに多くの獅子・狛犬が作られ寺院や神社の境内に安置されてきました。

それはここ九州でも例外ではなく、福岡にも優れた獅子・狛犬が残されています。特に和様（日本風）の狛犬にまじって宋風獅子と呼ばれる中国風の獅子がこの地方に集中して残されているのはわが国の獅子・狛犬の展開を考えるうえでも興味深く、また福岡と大陸との交流の歴史を示す貴重な証拠といえるでしょう。これまで彫刻として顧みる機会の少なかった獅子・狛犬ですが、本展示ではその多彩な表現と展開をご紹介します。」

綿津見神社の木造狛犬^{こまいぬ}については次のように解説してある。

「木造狛犬^{もくぞうこまいぬ} 一対

福岡市東区^{わだつみ} 綿津見神社

像高（阿形^{あぎょう}）29.7cm

（吡形^{うんぎょう}）30.0cm



綿津見神社保存の狛犬

吡形の頭部に角の跡があることから本来は獅子・狛犬の一対として作られたものと思われます。やや大げさにもみえる表情や体躯のプロポーシオンは室町時代（1392～1573）の狛犬にしばしばみられる特徴ですが、誇張された表現は像の小ささとともに逆に愛らしさを感じさせます。材質はクスで、全身を1本から彫り出しています。」

つぎに、当神社に現存する江戸時代の御遷宮などの記録をたどってみると次の通り。

八大龍王宮葺替の棟書に

社主 新宮浦惣之市・寛文10年(1670)

奉葺替八大龍王宮宝一字五穀成就村中安生之处

4月吉日 元禄2年巳歳(1689) 社主 新宮浦惣之市

前回の葺替えより19年目で定例葺替のようです。

きょうほう
享保11年(1726)

えんきょう
延享元年(1744)

ほうれき
宝暦13年(1763)

神主 新宮浦惣之市

あんえい
安永9年(1780)

神主 稲光宮内種久

かんせい
寛政10年(1798)

神主 稲光主計種実

ぶんか
文化13年(1816)

神主 稲光主計種実。庄屋、堺茂助

てんぽう
天保2年(1831)

神主 稲光山城正藤原種久

こうか
弘化3年(1846)

神主 稲光長門正藤原種臣

庄屋 久次郎

ぶんきゅう
文久3年(1863)

神主 稲光長門正藤原種臣

庄屋 喜三郎。

組頭 小四郎・弥三郎・卯七

なお、明治以降の御遷宮は次のとおり。

明治13年(1880)

明治29年(1896)

大正7年(1918).....新築

昭和8年(1933)

昭和29年(1954)

本来は昭和28年の予定だが大水害のため1年延期された。

昭和48年10月10日(1973)

平成5年10月10日(1993)



平成5年10月10日の御遷宮風景

2 . 竈戸神社

綿津見神社境内にあって、太宰府の竈戸神社から分社されたものだが、その経緯は不明。

3 . 須賀神社（舞神社）

『^{かみのやま}神山（美和台三丁目10番付近）という所^{まつ}にあり うまし茸芽彦兎命を祀る 相殿に祇園を祀る 故に今は専ら祇園とのみ称す 古しえは神官 奈多浦三郎天神（志式神社）の祭礼を行う時 先ずこの社に詣でて 舞をかなでて後 かの社に参りし故に 舞神社といえるとなん』[筑前続風土記拾遺・青柳種信著・天保年中（1830～1844年）の書]とある。

また、粕屋郡史には『疫病防禦の為祀る』と書かれていて、大正12年（1923年）この地綿津見神社境内に移設された。

奈多志式神社では、お供日の11月19日の日没から伝統「夜神楽」が氏子によって奉納されている。昔は、粕屋郡内の神社の神官がこの須賀神社に集まり、舞をかなでて（リハーサルではないか？）後に奈多志式神社にて「夜神楽」を奉納していたらしいが、次第に神官の集まりが悪くなったので、今日のように氏子によって奉納されるようになったのではないだろうか。



須賀神社（舞神社）



黒津神社

4 . 黒津神社

土器山（神山か響崎では？）に祭神武内宿禰命が祀られていた。正保年間（1644～1647）託乗寺が響崎（三苦四丁目3番）への移転に伴って黒山（三苦六丁目7番の西方の小高い丘）へ遷座され、大正12年（1923年）にこの地綿津見神社境内に移設された。

福岡県地名辞典には『昔香椎宮の神籬（神様の食物）を蒸したというこしき嶺からは土器が出土し、

一名土器山ともいう』とあることから、この土器山の所在について香椎宮に問い合わせたが分からなかった。

古老の話によると、子供のころ黒津神社が祀つられていた黒山の西側約150m先の同じ黒山の小高い丘の上で地面を掘ると、土器の破片が出ていたとのこと。もしかするとここが土器山かも知れないが、今後の研究課題としたい。現在も氏子中でお座が行われている。

5 . 若宮社 わかみや 綿津見神社境内

祭神は仁徳天皇（4世紀 第16代天皇）で、民の窮乏をみて3年間税の免除をしたり、農耕の神様として有名。毎年3月農業従事者によって駄祭りの神事が行われている。

6 . 稻荷社...綿津見神社の飛び境内地の森の屋敷に鎮座

7 . 三寶大荒神碑

竈の神、一般に火の神として家庭の竈の近くに祀られ、主として西日本では屋敷神として、同族で祭祀されていることが多かったようである。

裏面の文字は不明だが、以前は綿津見神社参道の入り口付近にあったのを綿津見神社境内に移された。

8 . 轡納山託乗寺 ひのうざん

寺 地 三苦4丁目3-23

宗 派 浄土真宗 大谷派

いわれ

文禄3年（1594年）秀吉の陣中見舞いに西下してきた教如上人は、帰りの途中たまたま青柳村に在る良泉寺に宿泊した。そのとき住職「唯念」から京都への随行を懇願され、断りきれずに許した。

唯念は尊崇する師匠の許で数年間修業に励み、「本尊阿弥陀如来」二体を戴いて帰国し、良泉寺を従来の天台宗から浄土真宗（浄土真宗本願寺派）と宗派を改め、寺号も託乗寺と変えた。そして、高齢だったためかこの寺を琳伽に譲った。

阿弥陀如来に「筑前国糟屋郡青柳町・願主託乗寺琳伽」の添書があるといわれている。

粕屋郡史には『開祖琳伽、天文年間（1550年前後）創立 初めは青柳町に在りしを正保三年丙戌（1646年）ここに遷し同時に寺号・木佛を許さる（境内295坪檀徒61戸）』とある。琳伽には長男願寿と次男願入の二人の息子がいた。次男の願入と共に正保3年（1646年）5月15日、当時粕屋・宗像の郡奉行であった久野貞右衛門重時の計らいで三苦に移り、名称だけが残っていた般若寺を再興して託乗寺と改め開基した。これは父唯念が戴いた「本尊阿弥陀如来像」のうち一体を戴いて分家してきたものと思われる。



託乗寺本堂

その後のあゆみ

貞享2年（1685）久野清左衛門重時「木魚」寄進

貞享5年（1688）4月26日（当時旦那衆122人）

一如上人下附「祖師聖人御影」1幅 久野重時寄進

元禄6年（1693）5月5日

常如上人下附「琢常如上人御影」一幅 久野重時寄進

宝永7年（1710）久野重時「のみ」一口寄進

時代関係からみて、新開築堤工事（1703年）に使用された「のみ」ではないだろうか。

寛政3年（1791）庫裡建立

当時、寺運が非常に盛んだったと伝えられている。

文化14年（1817）七世願念が死没したのち、博多妙行寺（現在南区野間）の掛け持ちとなり、次第に門徒が離散してしまったと伝えられている。

天保3年（1832）のころ再興されて今日にいたっている。

昭和26年（1951）吊鐘および鐘楼が工費49万円で落成した。

昭和44年（1969）庫裡改築

昭和60年（1985）3月本堂新築

平成10年（1997）10月庫裡新築

9 . 般若寺

再興したと伝えられている般若寺は、延暦5年（805年）最澄（伝教大師）が中国からの帰途、新宮町上府の千年家に滞在して布教中、立花山麓に独鈷寺、三苫にも草堂（般若寺）を建て、立花山の樟の木で虚空蔵菩薩像・阿弥陀如来像・薬師如来像の三像を刻んで納めたと言われている。

その後、薬師如来像は行先不明、阿弥陀如来像は三苫六丁目の堺博行氏宅で祭られていたが火事で消失した。

般若寺は最澄の上京後、やがて荒廃してしまった。場所は永吉政昭氏宅（三苫六丁目16番）の裏側付近で、立花城の祈念所として栄えていたが大友氏に焼かれ、以後荒廃したとも伝えられている。



般若寺跡の太師堂

その跡地と思われるところに、1720年ごろ建立（現在のお堂は1929年7月改築）と伝えられる青面金剛像を祀った太師堂があり、祀られた二体の像の左側の像には安永8年（1779年）正月と刻字されている。この付近は当時、三苫の第1号幹線道路の入り口に当たっていて、村の北入口を守護される石仏であったのだろう。

昔は、ここに大樹があって、昼でも暗いので、夜独りで歩くと「馬の足が下がってくる」とよくいわれていた。

10 . 久野貞右衛門重時（圓嶺宗覺居士）の墓

正徳5乙未年（1715）8月13日逝去

三苫黒山（三苫三丁目27番北側の山林内）にあって、古い記録によると久野氏は黒田の重臣（久野清左衛門重時とは親子ではないかと考えられる。清左衛門の墓は「山の内」にあったそうだが現在は見当たらない）で、当時粕屋・宗像の郡奉行をしていたと伝えら

れており、託乗寺のため非常に尽力された人であって、三苦付近に別荘を持っていたのではないかと考えられる。

また、三苦南方にある博多湾の築堤に貢献した人物と思われる。今はすっかり環境が変わってしまったが、当時の三苦～奈多唯一の貫道沿いの三苦の丘陵上から、久野氏は開発の進み行く三苦一帯を眺望していたのではないだろうか。



久野貞右衛門重時（圓嶺宗覺居士）の墓

11 . 三苦^{こくうぞうぼさつ}虚空蔵菩薩

正月13日は三苦^{こくうぞうぼさつ}虚空蔵菩薩のお祭り日である。虚空蔵さまといえば、かの日蓮上人が「我を日本一の智者となし給え」と幼少の時から願いを立てていた佛様のことだという。

虚空蔵菩薩の御堂は綿津見神社境内に大分古ぼけて建っており、そのお祭りの日には珍しい貸借契約がされる。

参拝者は、先ず昨年の今日借りた金を倍額にして返済する。そして今日も又新しく借金



虚空蔵菩薩像

して、来年の今日、倍額にして返済する。この虚空蔵さまから借りた金を身につけておくと、金に不自由しないといわれている。また、大金儲けをすともいわれ、面白く、かつ珍しいお祭りである。

福岡市政だよりの「東区再発見」に、「……拝殿のわきのお堂に、木造の菩薩像がある。1mほどのクスを彫ったものだが、かなり老朽、顔だちも定かでない。この像が知恵の神、虚空蔵菩薩だ。三苦では財宝の神として『縁日（1月13日）に菩薩から金を借りると、1年間は小遣いに不自由はしない』という数百年の信仰がある。小銭は地元で用意。お守りとして金銀の紙でくろみ、世話人が参拝客に手渡す。小銭を借りた

参拝客は1年後、感謝の意で借りた金額の倍額を返しに訪れる」と紹介してある。

先に般若寺の項で説明したように、^{さいちよう}最澄（^{でんぎょうだいし}伝教大師）が中国から帰り、刻んだ三像のうちの虚空蔵菩薩像のお祭りである。

現在の虚空蔵菩薩像は明治初年に盗まれて古道具屋に渡ったこともあったが、無事に保存されており、非常に貴重なものである。



虚空蔵菩薩の縁日（1月13日）風景

日本地名大辞典には『この木像は、崇徳院の時（1123～1141年）海中から取り上げたものであるが、天正年間（1573～1592年）に堂舎が焼失した為八大竜王社（綿津見神社）に移したとも伝える』と書かれている。

この虚空蔵堂の鰐口に「奉施人、筑前州香椎郷北庄三戸摩村虚空蔵堂鰐口永享7年（1435年）^{きのとう}乙卯月（4月）吉日大壇那施主 次郎四郎敬白」と刻んであったと太宰管内志に記録されている。また、「^{きょうほう}享保10年（1725年）10月、三苦の農夫某、偶然にも畑地から掘り出した鰐口に永享7年（1435年）銘の鰐口がある」とも伝えられている。

またの伝えによると、「享保10年（1725年）三苦の農夫が竹林の中（現在の三苦六丁目永吉政昭氏の家の前に建っている青面金剛碑の付近）から青銅鰐口を掘り当て観音堂に納む…」とあるが、戦後盗難にあって紛失したとのこと。

しかし、三苦の観音堂は1870年の建立であるから、鰐口も転々として最後に観音堂に納められたのではないかと思われる。

鰐口の出土地点は、805年頃に^{でんぎょうだいし}伝教大師が三苦に建立されたといわれる^{はんにようじ}般若寺の跡付近である点を考えると興味深いものがある。

12．観音堂

三苦購買店前（三苦六丁目7番）にあって、本尊観世音菩薩を中心に左右に不動明王、準胝観音の三体が祀られている。1870年頃、堺義博氏（三苦六丁目10番）の曾祖父喜三郎氏が建立されたといわれている。現在の観音堂は1958年、道路拡幅に伴い改築されたもの。

また、その隣の堂内には地藏様二体と破損一体が祀られている。当時は三苦集落の南西方面の入口に近く、この方面の守護神として祀られたものと思われる。



三苦購買店前の観音堂

13．^{もんじゅう}文珠菩薩



文珠菩薩

共同納骨塔前から綿津見神社に通ずる道路の左側（海岸側）の小高い丘の上に祠がある。通称「お文珠さま」と呼ばれる文殊菩薩は、学問の神様で字が上手になるといわれ、以前は沢山の筆が「お文珠さま」の前にお供えされていたといわれている。毎年1月・5月・9月の25日は「お文珠さま」のお祭りで、その日は三苦中の子供たちが集まって、「お文珠さま」を井戸水で洗ったり、参道の小

石を三苦海岸の新しい小石と取り替えたりして清掃した。清掃が終わると各隣組に分かれて各自の家から米や醤油を、また、お金も少し持ち寄ってご馳走を作り、先ず「文珠さま」にお供えをした後、みんなで会食した。歌ったり、鬼ごっこや試胆会（肝試し）などを楽しく遊ぶ。子供たちにとっては、年3回の文珠さまのお祭りは、何よりも楽しい行事だったらしい。

14 . 青面金剛碑

碑面の裏には「享保二年（1717年）八月十三日一同」と刻書されている。

新宮の湊から森の屋敷（三苫小学校北側）の稲荷社前、共同納骨塔前を通過して松原の中の「久野貞右衛門墓碑」（1715年）の前を通りぬけて「山ノ内」（三苫二丁目北側、字名としても残っており、昔この三苫・奈多海岸の大松原の監視官の駐在地と考えられる）の前を通り、奈多の志式神社へ通ずる道がある。この旧道が新宮湊～三苫～奈多を結ぶ最初の公道であった。

「青面金剛碑」は、この道に沿って堺澄夫氏（三苫六丁目19番）の敷地の角、三叉路脇に立っている。三苫の北側の守護神だったかも知れない。和白地区では17番目に古い石碑といわれている。



青面金剛碑

15 . 庵縛日羅夜叉咩碑

昔、青面金剛をお祈りするためにあったと思われるところに、昭和54年12月吉日、「庵縛日羅夜叉咩」と刻書した石碑を青面金剛碑の傍らに建立された。

この「庵縛日羅夜叉咩」とは青面金剛にお祈りをするときの「ご神言」といわれている。



庵縛日羅夜叉咩

16. 七 橋

筑前風土記拾遺（青柳種信著・天保年中1830～1844年）に『この村に七橋と云う事あり 夕尺の橋二所・塩田橋・光畝町橋下の前橋二所・池尻橋これなり 中にも夕尺橋は村の前 新宮浦の方に行く道の側に小なる石橋あるをいう かまど山（宝満山の中腹）の修験者入峯の時 必ずここに来りて修法する也 古来よりの例と……云々』とある。今は橋としては使用されていないが、三苦小学校北東側から新宮町方面へ通ずる三叉路の道路端に現存していたが、三苦浜土地区画整理にともない「森の屋敷」へ移された。

17. その他史蹟石造物

正覚坊外石物 1 体

堺 憲一氏宅地内（三苦六丁目4番）の南東側道路面であって「寛文九年（1669年）十一月」と刻書されている。（昔は三苦集荷場敷地に祀られていた）

宝満山の修行僧「正覚坊」は、長い修行の途上病氣となり、衰弱しきった身体を先輩僧に引きずられるようにして、殿様道 - 塩浜 - 大砲道 - 奈多 - 三苦へとやってきたが、夕尺橋に到着する寸前でついに命を落とした。

三苦の人々はこの若い修行僧「正覚坊」の死をあわれみ、遺体を字松口（現在地付近）の松原に埋葬し、そこに「正覚坊」の石碑を建立して祀ったと伝えられている。



正覚坊碑



堺輝政氏宅の庚申天

庚申天 堺 輝政氏宅（三苦六丁目10番）寛政9年（1797）正月吉祥日、堺 輝政氏曾祖父 酒井太平氏が建立された。（酒井は堺の旧称と考えられる）

昔の三苦は丘陵地帯であって、幹線道路も丘陵地帯を通っていた。その後、集落の発展に伴い、住宅が次第に旧海岸線（三苦水道）へと下りてくると新道の必要が生じ、現在の消防格納庫前 集落の中央部 旧幹線道路へつなぐ第2の幹線道路が寛政年間に竣工し

た。これを記念し、その守護神として時の指導者 酒井太平氏によって建立されたものと思われる。

三庚申 綿津見神社境内

イ、「天文^{てんもん}十四年（1545年）」の刻書がある庚申塚で、和白地区では二番目に古い庚申塚である。天文のころは割合と平和が続き、博多は貿易で大賑わいのころで、三苫も集落前の三苫水道が少しずつ干拓され、その護岸を祈って建立されたのではないだろうか。

ロ。「文化^{ぶんか}十年（1813年）」の刻書がある。

ハ。「文化^{ぶんか}十三年（1816年）四月吉日」の刻書がある。以前は消防格納庫の東側にあった。

イ。ロ。ハ。いずれも大正12年（1923年）の耕地整理によって現在地に移された。

庚申尊碑 三苫山の内（三苫二丁目北側）松林内

「天明^{てんめい}五巳年（1785年）卯月（4月）上旬」の刻書がある。「奈多公民館だより白砂」には「天明4年（1784年）に奈多村に疫病が発生、併せて飢饉の年であって病死者、餓死者が続出したので、村人は鎮守様である奈多三郎天神に参籠して、悪病平癒を祈願したところ、不思議に平癒することができたので、村人は神様へのお礼にと、芦屋の大蔵組を呼んで歌舞伎を奉納したのが、奉納芝居の始まりで、『万年願』として今日も受け継がれています」これが7月の奈多祇園祭りの奉納芝居であろう。このころ建立された和白地区の石仏は、こうした背景のもとに、建立されたものであろうと推察されるが、山ノ内のこの「庚申尊」もその一つと思われる。



日露戦役記念碑

日露戦役記念碑

綿津見神社境内

明治39年4月1日の建立

綿津見神社の仏像群

綿津見神社の境内地には、福岡市有形文化財第75号に指定されている5軀の仏像群がある。玄界灘を眼下におさめ、西に志賀島、北に相島を望む宮山（旧字名）に位置する綿津見神社の仏像群である。

江戸時代の地誌である「筑前国続風土記附録」「筑前国続風土記拾遺」にも紹介されている神社境内の大日堂、虚空蔵堂に祀られている。

小振りながらも保存状態の良好な一木造の不動明王立像、吉祥天立像、風化が進んでい



不動明王立像 吉祥天立像



伝大日如来像

るが4尺（約121cm）を越える如来形立像（伝大日如来像）、木造伝虚空蔵菩薩立像のこれら4像は平安時代（794～1192）後期の作とみられ、さらに南北朝時代（1333～1392）の作とみられる木造伝薬師如来像、袖を「8」の字形に彫出する点などは平安期の大宰府文化圏に入り得る作品であり、近年宗像、津屋崎で発見された平安後期の仏像と同系統と考えられるものである。

これらは、当地域における古代、中世の宗教文化を物語り、玄界灘沿岸の仏教圏を想定させる貴重な仏像群である。



伝薬師如来像



綿津見神社下には三苦浜の美しい砂浜が続く

三苦水道・三苦島

元九州大学教授 山崎光雄氏は、諸説から、昔博多湾より三苦を通って新宮町の湊に通ずる地域は三苦水道と呼ばれ、この水道で隔てられた三苦・奈多一体を三苦島と名付けている。

その昔、和白地区はこの三苦水道によって二分されていたといわれ、この三苦水道の東側（美和台側）を東浜、西側（三苦側）を西浜、そして相浦から塩浜を巡って下和白に至る海岸一帯を「桂浜」と呼んでいた。

この三苦水道・三苦島を検証してみると。

1. 天慶^{てんぎょう}4年（939年）5月、とぎの大海賊^{ふじわらすみとも}藤原純友の一党が突如として博多に上陸し、水城から大宰府になだれ込んだ。このときのことを記した太平記の一節に『さる程に純友は博多の津に寄せんとて 帆の下に櫓を立て もみにもんで馳ける程に 六月六日子の刻に 箱崎の沖を通るとて 渚をきつと見渡したるに 八幡宮の宝殿を本陣とし 松原に白旗四・五十流 官軍の将 六孫王経基の旗なり……云々』と記されている。

従って福岡在住の学者の方は「玄海灘から志賀島半島を迂回し博多の津を襲うとすれば、太平記の一節『箱崎の沖を通るとて 渚をきつと見渡したるに……云々』はおかしく、今日の地勢からも考え難い。そのころ（約1060年前）は香椎の海と湊（新宮町）の外海とが相通じている海峡（三苦水道）を純友の一党が航行して攻め寄せたのであれば、先の太平記の一節が納得できる」との説を立て、同感の声がしきりであった。

2. 更に今日より約900年昔の夫木集^{ふぼく}（和歌などを書いた歌集）に、香椎潟と相島との光景を連結して詠んだ和歌に、『香椎潟 夕きりかくれ 漕ぎくれば あへの島はに千鳥しはなく』（鎌倉初期の人小侍従作）とある。したがって今日のように香椎から遠い志賀島半島を迂回して相島に至る航路では、このようには詠み難いと思われる。

筑紫の郷土史家 中山兵次郎先生の説によると、1300年ごろの博多湾沿岸は、現況の等高線で5メートル位までは海であったと述べている。

また、新宮町をとり上げた朝日新聞（昭和34年7月31日付）の“海辺の社会学”によると、「玄界灘に面して磯崎鼻から弧を描く砂丘（中略）この砂丘も、その背面の新宮の家並も、2000年位前までは海の底だった。むかし磯崎鼻は島で、この島と陸地との間には博多湾へ通ずる水道があったという。それが陸続きになったのは、九

州北岸一帯の隆起と砂の積み重なりのためだと考えられている。この辺の土地は4000年の間に約10mも高まったというのだから、隆起は著しい。(後略)」と記されている。現在、三苦から湊に通ずる途中の海拔は3m前後であって、土地台帳の小字名などと対比すると、崎・浦・浜・塩・牟田などの名称で繋がっていることからして十分に肯定できる。

しかし、前記の説に対して「水道・島と言うことになれば、三苦と湊との境の丘陵地帯の土地はもう少し低く、土質も他の地区と同様に砂壤土でなければならぬはず。また、東西両側の山は同じ土質である。湊側が急勾配、三苦側が緩勾配の丘陵地をなしている点から見て、人工によって埋め立てたものとは考えられない。あそこは元もと東西陸続きで、湊側からの入江と三苦側からの入江が互いに背中合わせになり、夜になれば漁船が泊居をしたら双方からの漁火が見えていたためトモシアワセ(灯し合わせ)と言う地名が出来たのではないかと思われる。また、トモシアワセより一寸南寄りに塩入という所があるが、ここはかなり後この地方が干拓されていたものの、大潮の際にここまで溝に海水が逆流して、時には田圃へも流れ込んでいたのでしょう」と疑問を抱く人もある。

昭和34年7月31日 金曜日

海辺の社会科学

新宮

二千年位前は海底

隆起した海岸 玄界に面して海島から海をゆく砂丘、その上に建ちた松林は博多湾側の砂浜の中でもとりわけスゲールが大きい。ところがこの砂丘も、その背面の新宮の隆起も、二千年くらい前までは海の下だった。むかし隆起は急で、この地と隣縣との境には博多湾へ通じる水道があったという。それが隆起きになったのは、九州北岸一帯の隆起と砂の積み重なりのためだと考えられている。この辺の土質は四千年の間に約10mも高まったというのだから、隆起は著しい。一々、海が運んできた砂の積み重なりについては「筑前国志摩十記」に「天和年中海辺の町也……海辺をならして邑

の跡を形え外前に土塚を築き松を植え」とあるところから、約二千年前に隆起に築かれた土塚を起源に砂丘が発達したものであろう。

隆起開始の時期は明神初年、砂に埋れていたのを掘り出したというが、これは砂丘の隆起を指すものだろう。二千年位までは海岸線がいまの位置から二、三m入り込んだ夜間あたりだったのだから、新宮は、海原から湧き上った町、といえる。(前九大教授山岡光夫氏の説)



新宮町を取り上げた朝日新聞「海辺と社会学」

三苦に塩田を開く

慶長7年（1602年）黒田長政は命令して三苦村から湊村を分村させ、庄屋役を善兵衛に命じたと記されている（犬鳴山由来記）。慶長10年（1605年）の塩田開拓を予定したものであろうか。続風土記によると「慶長10年（1605年）黒田長政、粕屋・志摩・早良の諸郡に塩田を開く」とある。このときの塩田に三苦、湊、浦、泊、太郎丸、桑原、元岡、野北、芥屋、姫島、馬場、青木、姪浜の13カ所が挙げられている。

三苦の塩田は今も字塩田として地名が残っており、耕地整理以前は干魃の時には塩害が甚だしかったようである。塩田のあった位置は、JA福岡市東部三苦支店前から三苦駅を結ぶ道路の途中水路から北側一帯の地域であると考えられる。

塩田についての三苦の古老の方々の話をまとめてみると次のとおり。

1. 字光畝町（JA福岡市東部三苦支店の付近）の一角に「しまぐり」と呼んでいる場所がある。塩田の焼けた石が邪魔になるので、干拓の際、島の様に積んでいたところではないとか考えられている。【堺登美次氏談】
2. JA福岡市東部三苦支店前から三苦駅を結ぶ通りの途中（スーパー大栄付近）に「井樋の上」という字名がある。また、その北側一帯を俗に「塩屋の上」とも呼んでいた。これらから考えると塩田の南側には石垣堤防が築かれ、井樋から海水を塩田に引込む入浜式製塩が行われていたのではないかと考えられる。

黒田長政は播州赤穂地方にも住んで居たことがあり、製塩法について、また塩が非常に利益のあがる産業であることも熟知していたようだ。そこで城や城下町造りに多額の経費を使いながら、その一方ではこうした産業振興にも並々ならぬ努力を払ったのではないだろうか。三苦の塩田開発は藩の事業として行ったのであろうから、糟屋郡一帯から多数の農民たちが公役として狩り出され、三苦は大変な賑わいだったものと想像される。
3. 西浜（県道より西側・海浜公園道路三叉路付近）一帯には焼石が非常に沢山あって、所どころにうず高く積んであったのを記憶している。塩焚がこの付近で行われていたのは間違いないと考えられる。大正12年（1923年）耕地整理の時、東浜一帯（県道より東側・託乗寺の前方付近）は塩分が多く出て耕地に適しそうに

ないことから、糸島に同じ様な所があるとのことで耕地整理の役員が視察研究に行ったこともあった。また、「井樋の上」からは木の樋が出土した。【吉浦弥太郎氏談（故人）】

この三苦塩田の開発で、奈多や和白からかなりの人々が製塩事業に従事されたことと推測され、出来た塩は舟で黒田の倉庫に運ばれたことであろう。

開発が進む三苦



三苦の溜池

三苦の耕地両側の丘の上に大小の溜池が構築されている。これは当時の三苦集落前の干拓地で水田化が進展したため、農作物の灌漑用として構築されたもので、三苦農業の発展に大きな役割を果たしてきたものである。

当時は一つの土木事業が計画されると近隣町村の農民たちが動員され、三苦の溜池にも糟屋郡内の人が公役くやくに従事し、郡奉行の監督の下で強制されたと伝えられている。

釘ヶ浦池（大池） 三苦八丁目

筑前風土記・天保年中（1930～1844年）の書に「その池塘ちとう（池の堤）・釘ヶ浦（三苦八丁目）にあり 水面一町五反五畝（1.55ha）」とある。

構築 天和元年（1681年）
水面積 1町5反5畝（15,500㎡）
水掛かんがい（灌漑）面積 21町（21ha）

清水池 三苦7丁目三苦小学校北側

構築 貞享二年（1685年）
水面積 9反7畝（9,700㎡）
水掛かんがい（灌漑）面積 13町（13ha）

釘ヶ浦池の堤防の上に建てられている記念碑に次のような記録がなされている。

表面

釘ヶ浦・清水溜池災害復旧記念碑
昭和三十七年（1962年）三月一日
福岡市大字三苦町内会

裏面

釘ヶ浦池は天和元年（1681年）清水池は貞享二年（1685年）の創築なり
偶々昭和三十四年七月十四日九州北部海岸を襲いたる稀有の豪雨は瞬時に増水し
その限度を越え遂に堤防崩壊せしも 町民



釘ヶ浦溜池堤防にある釘ヶ浦・清水溜池災害復旧記念碑

必死の作業効を奏し決壊を喰止めたり その改修内容は釘ヶ浦百五十万円・清水八十万円にて石垣及全堤防の内肌付、余水口等修築せり

右側面

和白町長 小林市助 同助役 今林久二 三苦区長工事委員 永吉恒幹
 工事委員 堺 義美 農業委員工事委員 堺 新一郎 同 岩熊常雄
 農業委員 末信嘉平 同 吉浦弥太郎 同 堺 藤三郎

高田池 三苦七丁目

構築 げんろく 元禄元年（1688年）
 水面積 2反5畝（2,500m²）
 水掛 かんがい（灌漑）面積 2町5反（2.5ha）

山の口池（新池） 美和台五丁目

構築 げんぶん 元文元年（1736年）
 水面積 3反5畝（3,500m²）
 水掛 かんがい（灌漑）面積 3町8反5畝（3.85ha）

曾根崎脇池 美和台三丁目

構築 えんきょう 延享3年（1746年）
 水面積 1反（1,000m²）
 水掛 かんがい（灌漑）面積 不明

永浦池 美和台五丁目東側

構築 ぶんか 文化4年（1807年）
 水面積 8反5畝（8,500m²）
 水掛 かんがい（灌漑）面積 15町（15ha）

構築以来300年の永きにわたり三苦の農業を護り続けてきた溜池も、近年の急速な福岡市東部ベットタウンとしての発展によって、農地は次々にアパートやスーパーマーケットと変わり、溜池の利用も減少し現在は温室苺の灌水用として活用されている。これも時代の変遷かと感慨深いものがある。

三苫宮の下護岸工事

明治40年（1907年）6月から始った三苫綿津見神社宮の下の護岸工事は、明治41年高潮の被害を受けながらも、明治42年8月に竣工した。

この三苫海岸護岸工事は、戦後も年次計画で営林局の手で行われたが、明治42年竣工のものが最初と思われる。これを記念する「護岸工事記念碑」は、三苫集荷場の地にあったが、集荷場建設の折、三苫共同納骨塔前に移設された。

碑によると、当時の糟屋郡長は新納 久、和白村長 安河内利三郎、三苫区長 堺 初太郎、建設者 大字三苫と記録されている。なお、「三苫海岸の満潮干潮の差は約六尺（約182cm）位なり、竣工した護岸工事は百二十間（約218m）」と記録されている。



三苫海岸 護岸工事記念碑

三苫の農業

1. 水田

三苫別家古文書写しには、永正^{えいしょう}8年（1512年）正月23日付 御田千徳丸当地行注文に『一、三苫郷竜王田地尻壹段九日田』と記載され、天正^{てんしょう}年間（1573～1591年）の指出前之帳には『湊村を含めて田七町（7ヘクタール）余・分米六百五十八石（118.7トン）余、畠三十町（30ヘクタール）余・分大豆百三十一石（23.6トン）余』と記載されていて、古くから米づくりが行われていたようである。大正8年（1919年）牛馬を操っての土地の深耕技術と農業後継者育成・心身鍛練を兼ねた競犁^{けいりかい}会が始められた。その代表的な糟屋郡競犁^{けいりかい}会は全国一を誇っていたという。

水田の深耕技術の向上と共に、水田裏作として菜種、馬鈴薯や玉葱が栽培されるようになった。しかし、地形的に見た場合、北・西・南の三面を海に囲まれていて、稲の開花期の潮風害とその土質、それに排水不良の湿田であったため、米づくりは全国平均の下位にあったと想像される。このため、大正12年（1923年）に大掛かりな耕地整理事業が行われ、水稻はもちろんのこと、裏作においては畑同様となり、都市圏への野菜供給地三苫となった。

三苫は、海岸に近い低地で、字名に東浜、西浜、塩田、塩入や「灯し^{とも}あわせ」などの地名が残っており、昔は海域か海辺であったと考えられる。水稻成育中に日照りが20日も続くか、灌漑水が不足したときなどは塩害と思われる成育障害が発生した。昭和初期に塩抜き排水工事が行われると、その後は塩害が無くなり、水稻はもちろんのこと水田裏作の菜種、馬鈴薯や玉葱などの作柄が向上して、三苫の農業に一大福音をもたらした。

しかし、昭和5・6年には日本国内に米が余り、価格が暴落。昭和7年の5.15事件や3年後の2.26事件などの政情不安。そして昭和12年の盧溝橋^{ろこうきょう}事件以来、若者は軍人として召集され、老人と女性によって牛馬を駆使しながら農業を支えることとなった。

昭和20年8月の終戦後は、農地解放や同26年の農地の交換分合によつての農地の集団化と経営改善、これに付随した道路と水路の改良工事によつて農業の近代化が図られた。

昭和30年代からの高度成長によつて所得が倍増し、肉体労働を要する農業が嫌遠され、後継者難などから離農者が増加したりもした。その結果、農業経営を縮小し土地の有効利用を図るため、農地以外に転用する人が増え、農地は大幅に減少した。

2 . 養 蚕

明治42年、8戸による養蚕業が始まった。大正時代に入り国の輸出品の第一に挙がるのが生糸であった。そのため日本は国をあげて養蚕に力を注ぎ、三苦においてもこれに追従して、当時の養蚕と製糸関係の本場であった京都から養蚕技師 細見兼松氏（故人）を招へいした。細見氏は三苦に住み着いて、蚕の成育中は各戸を巡回するなど、指導に力を注がれた。それにより養蚕業は農家の貴重な現金収入となった。当時、100円紙幣は繭代金でないと得られなかったという。

昭和5年（1930年）細見兼松氏は和白村養蚕功労者として、閑院宮殿下に単独拝謁を賜った。しかし、年3回の養蚕は、生きた幼虫を育てることであり、米作とその裏作との間に昼夜を徹しての給飼や、その飼料の桑の葉を買い求めに、遠くは対馬や朝倉方面まで足を伸ばしたと伝えられ、なみなみならぬ苦勞のあとが忍ばれる。

3 . 苺

大正時代に全盛を誇った養蚕も、繭代金の暴落などによって終りを告げ、昭和初期には新たに始まった苺栽培に代わっていった。

新宮町湊の堺 卯三氏（故人）が夏大根を千代町の青果市場に出荷される折に、さかい重（大型の木製箱食器）に苺を入れて出荷されたのが始めて、当時、車力（荷車）1台の大根とさかい重一箱の苺の仕切り金額が同額であったので、これは有望な換金作物であると分かった。堺 卯三氏と親戚関係にあった堺 駿策氏（故人）が苺苗を譲り受けられ、堺 新一郎氏（故人）とともに、大正15年（1926年）に試作されたのが、三苦での苺栽培の起源である。

当時の苺は、品種名も不詳だが、新宮町が一足先に増反されたので「新宮苺」というようになり、別名オランダ苺とよばれることもあった。

昭和3年（1928年）前出の二人によって市場出荷がなされ、苺の有利性が再確認されてから営利栽培が始まった。昭和5年（1930年）には苺組合が誕生し、昭和13年（1938年）には最盛期を迎えた。苺の代金が三苦農家の最高の収入源となったが、第2次世界大戦などで戦時体制が一段と進み、昭和17年（1942年）には食糧管理法が制定されると、苺は栽培禁止となり、苺組合も立ち消えとなった。

戦後は統制経済下ではあったが、苺は裏作的に栽培できるので再開され始め、昭和22年（1948年）宮崎早生種（米国原産のパーソンズビューティ）が導入されると、2～3年後には三苦全体に行き渡り、従来の新宮苺と入れ代わった。苺組合も再編されて出荷は

もちろんのこと資材の斡旋も行うようになった。

その後、静岡の石垣苺・福羽種が導入され、促成は福羽種、露地は宮崎種となり安定生産がなされるようになった。昭和30年（1955年）農業用ビニールの出現により、福羽種の離段栽培は急速に伸び、三苦は苺の産地として広く紹介されて、苺の視察団がバスで大挙して訪れるようになった。



ビニールによるトンネル栽培

苺の改良品種が出回り、興津4号やダナー、宝交早生などと代わり、清浄栽培も強く打ち出された。昭和37年（1962年）には畑地灌漑施設が完成、昭和39年（1964年）には西日本鉄道と提携して、観光農業としてクーポン券で苺狩りを楽しませ、翌40年からはハウス栽培へと変わっていった。このころには苺の売り上げが三苦農家の収入のトップを占めるようになった。

そのうちに他の産地も年々殖えつづけたために、産地間の競合も十分考慮しなければならなくなり、栽培方法も改善され、短期株冷やジベレリン処理、昭和50年（1975年）には電照栽培が始まり、続いて連棟式のハウスが導入された。兼業農家は次第に減少し、専業農家になっていったが、昭和54年（1979年）からは完全共同出荷となって系統の共販への加入が行われた。

その後、主流を占めていた宝交早生も、果肉が堅く日持ちが良くて美味しい新品種の「はかたとよの香」の出現によって品種の世代交代がなされ、「はかたとよの香」が100%



ビニールの連棟式ハウス

栽培されるようになり現在に至っている。
【堺 泰作氏（故人）・
堺 義美氏（故人）の
記録から】

4 . 足踏式脱穀機と唐箕^{とうみい}

大正7・8年頃から稲の架け干しが始まり、足踏脱穀機の使用が始まった。それまでは^{せんば}千歯という道具を使い、腕力で稲の籾をこさぎ落していたが、この脱穀機の導入で作業は非常に楽になり、夜おそくまで納屋（農家の作業場）で石油ランプの灯のもと、「ガーラン、ガーラン」と音を立てて足で脱穀機を回しながら脱穀作業をしたものである。

足踏式脱穀機とともに普及したのが唐箕^{とうみい}である。唐箕は手で回し、風を吹き付け、穀物の中のゴミや“しいな”（実の入っていない籾）を選別して取り除く道具で、左手で唐箕をおさえ右手でハンドルを回して、脱穀した穀物のゴミなどを吹き飛ばし、下の方から出てくる穀物を“^{とうみい}唐箕じょうけ”で受け、片足でそのショウケを揺った。【末信源藏氏（故人）想い出から】

足踏脱穀機・唐箕は和白郷土史料館に展示



唐箕 足踏式脱穀機

5 . 競犁会^{けいりかい}始まる

競犁会^{けいりかい}が始まったのは和白村時代の^{けいりかい}大正8年（1919年）で、当時は三苦地区でも一大行事であった。競犁会の目的は確固たるもので、農業を志す若人の^{しんこうりほう}深耕犁法（^{すき}犁で深く耕す）の改良と、その心身を鍛練することであった。具体的には年令により3段階に区分し、甲組が年長者で19歳以上、乙組が16歳以上、丙組が13歳以上とに分かれ、その組毎に技を競うものである。

その内容は一定時間内に巾約1.5mの土盛の畝3本を、牛馬を駆使して仕上げ、制限された時間内で畝3本の出来栄を競うもので、その所要時間の割出基準は甲組は1.88mの距離に対し4分、乙組は5分、丙組6分であった。出場者には青年団の幹部の面々が、1週間にわたり熱心に指導した。本人もまた、全身全霊を打ち込み、日一日と上達して行く中で当日を迎えていた。

競犁会当日は、他の町村から来所された審査員により、出場者の牛馬の操作姿勢態度40点、出来型40点、深耕の程度20点を基準に審査し、甲・乙・丙と各組毎に1等1名、2等3名、3等5名といったように表彰された。これは稲収穫後の恒例の一大行事であっただけに受賞者の賞状には「糟屋郡進農会長」の氏名が記されていた。【堺 義美氏（故人）の記録から】



競犁会風景

6 . 三苦の耕地整理事業

大正12年（1923年）8月より起工され、2ヵ年の歳月を費やして大正14年4月に竣工した。それまでの三苦の農業は湿田が多く、しかも塩分の多い生産性の低い農地であったが、この耕地整理事業によって急速に近代的農業経営へと脱皮し、生産性は飛躍的に増大して三苦地区の経済的發展に大きく貢献した。

事業の概略

起 工 大正12年（1923年）8月

竣 工 大正14年（1925年）4月

残務整理終了 昭和4年（1929年）4月

総面積 53町1反4畝歩（約53ha）施工区域内の畑地含む

事業費 16,761円

組合長 堺 千代吉氏（故人・元村長で奈多居住であったが三苦出身であり、所有地

が三苦地区内に保有されていた)

副組合長 永吉 秀吉氏 (故人・永吉正隆氏の祖父、当時の三苦区長)

会 計 堺 代次郎氏 (故人・堺 澄夫氏の祖父)

2ヶ年にわたる工事で初年度は業者の請負工事であったが、2年目は三苦区の直営工事となった。

現在の消防格納庫から三苦駅に至る道路を境に、南側から始まり、翌年は北側に当たる上方の工事。土の運搬は竹製の丸シヨーケに紐を4ヵ所取り付け、更に返し紐が底につけてあり、担い棒で担ぎ目的地に着くと担い棒を肩から外すと同時に、返し紐を強く引くとシヨーケが返り中の土が出る仕組みになっていた。また、棕呂モッコという用具もあって、特殊な土や石などを運ぶ場合に使われ、大型で二人で担ぐようになっていた。

工期は米作に支障を来たさないよう、11月に始まり5月に終わるように配慮されていた。この大改良事業も指導者・地区民総結束の熱意で、将来のために払われた犠牲も大なるものがあり、その後の生産の拡充に大した功績となった。【故堺 泰作氏 (故人) の記録から】

7 . 三苦土地改良事業

福岡市大字三苦字畑田・黒山地区 (三苦二・三丁目) 一帯を対象に、国有林を含めた約125,000㎡の土地改良事業 (区画整理及び畑地かんがい) は、かねてから地元農民の強い要望であった。

昭和41年 (1966年) 2月、土地改良法の下に県知事の認可を受け、堺 駿策氏 (故人) を理事長として事業に着手し、昭和42年に事業の完成をみるにいたった。

事業概要は次のとおり。

区画整理

面 積 125,000㎡

関係者 93名

総工事費 1,166万円

内 農林漁業資金 932万円

自己資金 234万円

道路延長 2,948m

水路延長 1,977m

なお、道路幅員は、幹線6m・支線4m

畑地かんがい施設

面 積 40,000㎡

関係者 39名

総工事費 181.7万円

内 農林漁業資金 97.2万円

市補助金 52.29万円

自己資金 32.41万円

貯水槽容量 150 t

揚水機 タービン5.5kw

噴射パイプ 径50mm 60本

完成後は、本地区が福岡市のモデル地区として、苺を主体とした新しい観光農業の発展が望まれた。しかし、現在では、ほとんど宅地化されて完成当時の面影はなくなってしまった。



綿津見神社境内の
勲七等松浦到書の耕地整理事業記念碑

博多湾鉄道汽船株式会社

(現在の西日本鉄道) 宮地岳線

大正12年(1923年)8月、今の西鉄宮地岳線和白～宮地岳間の工事が起工された。営業開始は同14年7月1日で、当初は蒸気機関車に客車1両、荷物車1両の編成で運行し、三苫は無人駅であった。それから間もなく苺の栽培が始まると、福岡の青果市場への苺の出荷にも利用出来るようになった。

昭和4年には蒸気機関車から新鋭の電車に替わり、スピードアップも図られて益々便利な交通機関となった。懐かしい思い出の数々ある博多湾鉄道だが、この工事には多数の人々が従事した。それらの人々は和白の駅前から塩浜の東はずれの、通称枇杷の木谷と呼んでいた付近に飯場を作り住んでいたようだ。

三苫方面の工事を担当していたのは次のようだとされている。

1. 近藤組(三苫六丁目4番 堺 桂氏納屋)この組は託乗寺裏山の掘割り作業をした。近藤夫妻とその長男夫妻(夫は土砂崩れのため死亡)他に数名居たようである。作業員は主に土地の人を募集していたようで、三苫の住民はこの組で働いていたようである。
2. 黒田組(三苫六丁目16番 箱田家の納屋)この組は永浦方面(新宮町との境永浦付近)の掘割り作業をした。黒田氏夫妻(長男は和白小学校に入学)の他に隣の家に1組の夫婦が居た。永浦の畑に作業員の飯場を作り人が住んでいて、畑の隅に井戸を掘り、水を取っていたようだ。

なお、託乗寺の裏山を掘割った時、多数の棺桶(?)が掘り出されたが、いつ頃のものか分からなかったようである。三苫潟の干拓や製塩作業に他所から来ていた人達の墓か、立花城をめぐる大友、毛利の合戦で海へ逃れんと、三苫、新宮の方へ来た落武者の墓なのか、何れにしても多数の棺桶が発掘された事は事実である。また、その棺桶が点々としていた一帯は松茸の産地で、多数の狐が住みついていたという。

【堺 駿策氏(故人)・堺 泰作氏(故人)の記録から】



開業当時の博多湾鉄道